

江戸文化における大奥

The Shogun's Domestic Quarters in Japanese Popular Culture

アン・ウォルソール

Anne Walthall

森本恭代訳

アン・ウォルソール教授は、ウィスコンシン大学で日本語・日本文学の学士号を取得。その後、一年間の京都大学への留学を経てシカゴ大学大学院に進み、1973年、東アジア史の修士号を取得。さらに1975年から1977年まで東京大学へ留学、1979年、シカゴ大学で日本史の博士号を取得している。現在はカリフォルニア大学アーヴァイン校で歴史学科教授を務めている。

ウォルソール教授は、日本近世史・女性史を専門としており、江戸期における「百姓一揆」の研究をはじめ、松尾多勢子の伝記研究などの著作がある。そこでは、一揆や打毀しの記録を分析し、闘争への参加や自己主張を通じて、従来の女性規範が変容したと指摘している。また、松尾多勢子の日記やテキストから、女性の生きた社会体験を再構成することで、社会体制への認識やアイデンティティ、性別役割意識が分析されている。

著書は、*Peasant Uprisings in Japan: A Critical Anthology of Peasant Histories* (1991)、*The Weak Body of a Useless Woman: Matsuo Taseko and the Meiji Restoration* (1998) など多数。

ウォルソール教授は、2000年4月から9月まで、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターに外国人客員教授として赴任した。その間、「ジェンダー研究からみる日本の歴史」と題する夜間セミナーを講じ、公開シンポジウム「民衆文化における『大奥』」のメイン報告を行った。

江戸期日本の男性支配の世界では、女性的なものとして定義づけられた空間は、男と女の双方にとって好奇心と欲望の対象を成していた。そのふたつの最も顕著な例が、遊廓と、大名屋敷の奥や千代田城の大奥である。浮世絵、浄瑠璃、歌舞伎、黄表紙、戯作などにおける新吉原の表象や、女たちの風俗についての吉原の影響はよく知られているところである。だが、奥や大奥に住まう女については、彼女らが実際にどのような生活を送っていたのかに関しても、また民衆文化における偶像としても、これまでほとんど研究されてこなかった。しかし、漢文で書かれた実録と評される文学から春画にいたるまで、また文学や絵図といった多くの形式のなかで、御殿女中はある明らかな役割を演じていた。大奥についての論文が、その冒頭になぜ遊廓を引き合いに出すのか疑問視する向きもあるだろう。だが、わたしが以下に論じるように、これら二種類の女の空間は民衆の想像のなかで緊密に結びついていたのである。

江戸文化における大奥について述べるために、まずいくつかのことばを定義する必要がある。わたし

がこれまで調べたところでは、将軍の大奥と大名屋敷の奥との間に、民衆文化は明確な区別をしていないようである。女の隔離の程度、規模、また組織上の構造という点で、その両者の間に重要な差異があるにもかかわらず、奥向といったあらゆる空間は欲望の対象であった。徳川斉昭と阿部正弘の間で交わされた書簡においてと同様、将軍綱吉についての実録『護国女太平記』には、奥ということばが選択的に用いられていた¹。書かれたものや絵によって表現されたものは、民衆のまなざしから隠蔽されたあらゆる空間で起きていることに対する生き生きとした好奇心を示している。大奥や奥での短期の奉公は、庶民や武士階級の女たちにとって憧れの職業となった。大奥や奥はともに身分上の区別が確立され強化された場であったと同時に、外の世界ではあり得ないほど異なる身分の混淆が生じた場でもあった。

またわたしは、この論題に関する民衆文化の諸要素を定義したい。少なくとも、江戸では武士もまた文化的なものの創作や消費において主要な役割を果たしたため、町人文化ということばはつかわないことにしたい。わたしは文化ということばを、広く人類学的な語義においてではなく、第一義に娯楽に照準を当てたより狭い意味で用いている。ここにはひとつ問題がある。この種の文化が、フェミニストの賛同を得る空間ではなく、芝居小屋や遊郭といった空間と密接に結びついていることだ。さらに強調したいのは、民衆文化と社会的・政治的編成の関係である。身分制は極めて重要である。身分対立と魅力のダイナミズムは、文学がそうであるように、思想の発展においてきわめて重要な役割を果たした。武家と町人の互いへの根強い反感は、安藤昌益や海保青陵の記述に容易にみとることができる。只野真葛の「独考」や庶民の書いたものに、奥に対する批判がはっきりと持ち込まれている。しかし同時に、そこには互いに惹かれ合うものが存在していたのである。上流の人々のふるまいを模倣しようとする庶民の欲望はよく知られているが、最も身分の高い武家のまなざしが軽侮を込めて庶民に向けられていたにせよ、そのまなざしのなかに惹かれるものもあったということはあまり知られていない。昌徳宮の秘苑の両班屋敷を建設した朝鮮の朝廷や羊飼いの真似ごとをしてみせたフランスのマリー・アントワネットほどではないにせよ、将軍や大名は、六義園や吹上に東海道沿いの土産物を並べ、これを買って楽しんでいたのである²。

民衆文化におけるもうひとつの重要な要素は、さまざまな形式による女と資本の関係である。近世日本の経済史が強調するのは商品経済の発展であり、またとりわけ生産力の拡大である。女も商品を生産していたことが認識されるとしても、経済発展に対し、女が明らかに貢献してきたことは見過ごされがちである。消費や消費者に注意を払わない生産が会社を倒産させてしまうことを、われわれは今日よく知っている。江戸文化を分析して気づくのは、江戸が国家の政治的中心地であったと同様に消費の中心地でもあったということだ。実際、政治的権力の究極の指標は消費のための資源を自由にできる能力である。大奥についての物語は、常に金に言及し、誇示的消費を記し、立身出世を通じて莫大な額を制御できるようになった権力に執拗に焦点を当てている。この点で、経済発展史は女を考慮に入れなければならない。女は消費者である。女が家族の消費のために商品を購入するのであれば、単に自身を飾り立てるために商品を購入するのであれば、その購買力と金が商業を円滑に発展させたのである。表と奥との性別分離が保証したのは、女による消費が彼女ら自身の手になんとも委ねられ、男の嗜好によって指図されないことであった³。天保改革の際に年寄姉小路が老中に述べたように、大奥に奉公するために家族や子どもを犠牲にした女はよい着物を着るに値したのである⁴。

民衆文化に関する重要な特徴には、幕府による検閲がある。幕府による検閲は、時の出来事や将軍に関するあらゆることに及んだ。また、その他の重要な特徴として、男性的まなざしが遍在する男性中心

化された著作や視覚文化、事実に対する想像の優位、そして性の力が挙げられる。徳川時代、千代田城の外で書かれたものに大奥が登場することは、建前としてないことになっている。しかし、実際、多数の記事が明らかにするのは、内部で起こっていることについての情報の流布と女の世界を描写する民衆の想像力である。御殿女中を扱ったあらゆるテキストは、男によって産み出され、あるいは書かれ、表面的にはその多くが男の読者に向けられた。唯一の例外が「独考」であるが、それは非常に限られた人々をのぞいて普及することはなかった。近世史家は、徳川時代の実録から真実の核心をいくらかでもつかもうと多くの時間と労力をかたむけてきた。イメージがしばしば現実にとって代わる今日のポストモダンの世界においては、おそらくわれわれはよりよく江戸文化の想像力を認識することができるであろう。こうした特徴は大奥について記したテキストに特有のものではなく、民衆文化と社会的・政治的編成との関係、女と文化的・社会的資本との関係、そして想像力と事実との関係という、これらの諸関係に新たな光を投じるものである。

この研究のための史料には、日記、実録、浄瑠璃、錦絵、随筆、川柳が含まれる。それらを分析するには、ジャンルによって、階級的指向性によって、あるいは歴史的時代区分によって、多様な方法がある。また漢文で読み書きができる身分の高い知識人層と黄表紙を読むことのできる中間層、そして程度の差こそあるものの多くの非識字層との間にも差異がある。身分の高い知識人らは、時折中程度かあるいは教養の低いテキストを楽しみ、また、しばしば自分の娯楽のためにそれを書いたが、その逆は当てはまらなかった。社会生活におけるあらゆる領域と同様に文化においても、われわれは支配の問題を忘れてはならない。さて、わたしは史料を三つのカテゴリーに分類しようと思う。第一は、大奥との関係が將軍の男らしさを輪郭づけるような男性中心のテキストである。第二は、女性中心のテキストである。そこでは、男から隔離されているがゆえに互いにつき合う女たちが描かれている。第三は、女に向けられた民衆文化の諸要素である。そして最後に、徳川の歴史における重要な転換点を画定する仕方と、ジェンダー関係の理解をその歴史に組み入れることの重要性とを提示しようと思う。

男性を中心化したテキスト

江戸文化が男性のまなざしによって支配されているのであれば、女はどこにいたのであろうか。男によって書かれた日記は専ら男性の事件に焦点を当てており、そこに登場する女は極めて珍しい。忠臣蔵のような男性を中心に据えた多数のテキストにおいては、男性ヒーローの悲劇的な運命が、彼らが女にもたらした苦しみによって強調され、高められている。男は行為し、女は反応する。そうしたテキストにおける女の役割は補完的で不可欠である。

『藤岡屋日記』は、1804年から1868年までの江戸文化の記録として名高い。初期の巻では、その主要な焦点は幕府である。その筆者は支配階級に強い執着を抱いていたために、あらゆる町触と公に流布しなかったであろう多くの幕府の記録を書き残した。例えば、將軍の千代田城からの外出（お成り）、將軍家の葬儀や婚儀、天保の改革を広く公布した法令、また公職の任命記事などが書き記されている。將軍家斉の娘である文姫君が生まれた日、將軍の娘として育てられるべく御台所に引き渡された時、結婚した時、そして死んだ時の記録が書き留められた。家斉が死んだ際、筆者はかなりこと細かに喪の儀式を記した。そして、家斉の死で暇をとった女中の名と暮らし向きを記録したのだ。最初に記されているのは、最高齢の「うた」から最年少の「るり」にいたるまでの側室であった。「年来出精相勤め候に付き、

上臈年寄並に増し下され、別段御手当として年々金三百両宛下され候」云々と。こうした女たちは暇をもらった後生涯にわたる生活費に加えこの年金を受け取ることになっていたもので、それは悪くない引退設計であった。ある表使格御伽坊主は比丘尼になった。彼女もまた「只今迄取来御切米・御合力金・御扶持方、一生の内にこれを下され」た。ほかに、御中臈「さよ」から御半下まで、36名の女性が御暇を下された⁵。大奥女中に渡されたはずの御渡御書付の写しを手に入れるためにも、筆者には本丸に強力なコネクションがあったに違いない。こうした文書が町人に漏洩したことは、大奥にまつわる事柄が実際に外部に流布していたことを明らかにしている。だが、それが広範に普及していたかは疑わしい。

『藤岡屋日記』は、家斉の逝去の際に広まった落首も書き残している。曰く「芝居より花見がよいと奥女中」。芝居小屋が閉まったために、奥女中たちには、あまり愉快ではないものの、もっと上品に花見を楽しむよりほかなかった。「百人一首下ノ句」のあるパロディには、家斉の大御台による対句「永々し夜を独りかもねん」がある。直接的に対照をなしているのは、御部屋による次の句「寐屋のひまさへつれなかりけり」である⁶。こうした歌は庶民が家斉と御台所の関係をどうみていたかを教えてくれるものの、あくまで彼の死に関連して書かれ記録されたものであった。重大な出来事を別にすれば、『藤岡屋日記』の書き手は大奥の女たちに注意を払わなかった。筆者にとって、大奥の女たちは家斉との関連があるという限りで重要であったに過ぎない。

『藤岡屋日記』は、個人的な目的のためにひとりの男によって記述された。『甲子夜話』といった私的な、あるいは半ば私的な性質をもった他の記録もまた、時折、大奥の出来事や人々について言及している。だが、日記や随筆にみられる断片化した記述以上にわれわれが探求しなければならないのは、広範に流布したテキストであり、将軍と大奥の関係についてのより満足度の高い物語叙述のテキストなのである。将軍と大奥について産み出されたテキストから判断すると、綱吉も家斉も民衆の想像に明らかに強い影響力を与えてきたようであり、どちらの場合も、大奥との関係がその個性を輪郭づけている。

エキセントリックな犬将軍綱吉についての物語は、彼の死後も盛んに語られていた。1999年のNHK大河ドラマ「元禄遼乱」がなんらかの示唆を与えるとするならば、そうした物語が今日も隆盛であるということにある。綱吉の治世を回顧する人々にとっては、三つの問題が説明されねばならなかった。ひとつは、名君になろうと志した綱吉のような真面目な学者がなぜ学問にそむき、幕府を無視し、悪名高き「生類憐れみの令」を発したのかということだ。第二は、柳沢吉保の立身出世である。そして第三は、綱吉の死後、なぜ柳沢吉里が甲斐の領主になったのかということだ。江戸時代の想像力に性以外の説明は要らなかった。上流知識人のために漢文で書かれた『三王外記』や中間層の読者のために書かれた『元正間記』『日光郡鄂枕』といったテキストは、吉保が綱吉を性的に支配したと述べた。だが、そうしたテキストは将軍や他の上級役人を名指したために、貸本屋を通して写本として秘密裏に流通しなければならなかった。三田村鳶魚によれば、綱吉についての最も「俗悪愚陋」な物語が『護国女太平記』である。それをとりあげて論じよう。

『護国女太平記』は、お家騒動に関する実録というジャンルに当たる。こうしたテキストは男によって引き起こされた事件を描いているにもかかわらず、善良な、また、悪人の御殿女中や正室が重要人物として登場する。このようなテキストは、過去に実際に起きたことについての物語ということになっており、本当らしさを装って現実の人々の名を実際にあげている。それにもかかわらず、「虚実混雑、時代錯誤、さては御家老が百姓老爺の匂ひがしたり、殿様が町人臭さかつたり、腰元が踊子、御中老[原文ママ]が茶屋の仲居……らしかつたりもする」。『護国女太平記』に関しては、松浦静山の『甲子夜話』

に、林大学頭の子孫が次のように伝えられている。「影も形も無きことを造て書けり……[そのテキストが最初に書かれた時] 誰有て信ずる者も無かりしに、時移りて実事にもやと思ふ人も出来たり、遂には世を挙て様々なる齋東野人の語を伝ふるは残念至極のことなり」⁷。実録の根底にある態度は、真理を知るいかなる可能性もないとみる今日のポストモダンの否定とは異なっている。実際、人々は面白さのためにすすんで噂を捏造した。

大奥の女たちについて語られたものという観点から、『護国女太平記』の内容をみていこう。そのため、わたしは男たちについてのみ言及しているたくさんのエピソードを排除していく。あらゆるすぐれた歴史がそうであるように、その端緒は徳川家康の誕生ではじまるが、それはすぐさま主な話題である綱吉の生涯へと展開する。吉保が最初に綱吉の寵愛を勝ち取るのは綱吉が將軍になる以前、多くの他のテキストも主張するように、綱吉の性の玩具になることによってではなく、吉保の賢知に富んだ会話、踊り、歌を通して、綱吉の日頃の憂鬱な気分を引き立てたことによると言う。綱吉を楽しませることで、吉保は彼の母親である桂昌院の信頼を勝ち取る。そして吉保は彼の妻「おさめ」を桂昌院に紹介するよう取りはからう。「おさめ」は美しく、魅力的で、教養深い。桂昌院はすぐさま「おさめ」にたびたび訪ねるよう許しを与える。そして吉保は「おさめ」に言う。「此上の謀計は女色を以て君の心を乱し、思ふ儘に出世すべし」と⁸。

『護国女太平記』の主題のひとつは、男にはできない仕方で女は綱吉を堕落させることができるということだ。吉保の手中に陥る以前に、綱吉は女があらゆる悪の根源であると信じ、性的欲求を満たすために小姓をつかっている。その母である桂昌院は、綱吉が女より書物を好み、正室の許を訪れることも減多になく、側室をもたないことを長く気に病んできた。綱吉が母の許を訪れると、彼女は綱吉に「おさめ」の歌を披露する。綱吉は仰天した。それほどまでによい手になる素晴らしい歌が、女によって書かれたのだ。彼は「おさめ」を召して話をするやいなや、その美しさや気品ある物腰に心を奪われる。女も魅力的だと知ったことで、綱吉は吉保に側室を探すよう求める。綱吉は「うね」に満足したために御台所と性交渉をもつようになり、どちらも子をなした。綱吉が將軍になると、「御局福井、岡本、お柳の方等の所縁迄召出され、御旗本に取立てられ、夫々立身出世しけり」。吉保は「女の縁にて大名に取り立て」られ領主となった。こうして、男と女はともに富を得たが、女の得た富は男よりも少ないのである。

このテキストによれば、吉保はただ性の力を知っていたがゆえに、側用人から老中、大老へと上りつめる。彼は「うね」とその息子が死ぬと失墜する。綱吉は、母が彼のために探した五人の美しい妾には目もくれず、研究に戻る。だが、吉保が美少年を呼び物にした能楽に関心を向けさせると、綱吉はまたも吉保の奸計にはまってしまう。綱吉は、吉保が煽り立てたあらゆること、女色から衆道まで行きつ戻りつするのである。そうして、將軍の寵愛を得た男たちは大名になる。『護国女太平記』は、吉保の影響下で、綱吉がただ性に基づいて彼らを任命したと著している。その立身出世が吉保のおかげであるとすれば、吉保が推した男や女は彼の強力な支持者となる。「柳澤は工夫を廻し、男女の色を以て御心を迷しけるに、早晚遊興に泥み給ひ、美色を争ふ如くなりければ、出羽守[吉保]は心に悦び」⁹。

吉保の絶頂期をもたらしたのは、綱吉に遊郭の世界を与えたことである。まず吉保は、華麗な衣装を身にまとった五人の美しい芸子が歌舞でもてなす彼の屋敷に綱吉を招待する。綱吉はそれまでこのようなものを観たことがなかった。一転して、綱吉は秘密裏に芸子らを奥へと送りこむよう指示する。また吉保は七、八人の女を選び、芸を仕込む。好機が訪れると、吉保は彼女らを「御母公御台の御方へ御奉

公に差出」すよう策を練る。さらに、吉保は吉原におもむき「名高き……清浦と云う格子女郎」を身請けし、また京都の島原に玉萩を手に入れるため遣いをやっている。こうした女郎は、身支度の仕方や客のもてなし方といったあらゆる駆け引きの秘訣を教え、「おさめ」の師匠となる。綱吉がとりわけ退屈しているような様子のある日、吉保は綱吉を柳沢屋敷に招く。そこで綱吉は、太夫に扮した「おさめ」とともに吉保が建てた揚屋のある奥に招き入れられた。それまで遊郭に足を踏み入れたことがなかったために、綱吉は有頂天であった。彼はすぐに客としての自分の役割を学び、「おさめ」と性的な関係をもつ。吉保は十万石の領主となる。「おさめ」は女中の世話人という口実で大奥に召され、妊娠する。吉里の誕生は吉保にさらに二万石を加える。吉保はまたひとりの女を身請けし、彼女に芸を仕込み、綱吉のために女狂言を演じさせる。吉保は綱吉に女を斡旋する女術としてふるまうことで、また色々な仕掛けで新たな女を売り込むことで、綱吉の衰えたりビドーを刺激し、女色に惑わされたままにしておくことができるのである。

吉保は最終的に御台所によって失墜する。彼女は綱吉が「おさめ」と性的な関係をもっているという風聞を耳にしており、以前から君主と家臣との適切な関係を綱吉がおびやかしていることを戒めたいと望んできた。だが、「嫉妬の様に思われてはと貞節を守り」、何も言わなかったのである。吉保が綱吉に息子である吉里を家宣の後継者にするよう働きかけると、御台所はこのことは將軍家のお家騒動を引き起こし、天下の乱れをもたらすにちがいないと考える。彼女は綱吉を諫めたが、彼は御台所に耳を貸さない。そこで彼女は多くの大名と組んで、家綱を留めるなんらかの方法を見出そうと図る。令が発せられようとするその前夜、御台所は綱吉を居室の宴に招く。そこで彼女は今一度綱吉を諫める。綱吉は応える「天下の事は婦人杯の知る事ならず、又しても諫言だて無礼なり」。「国家の為」御台所は短刀で綱吉を殺す¹⁰。

「国を護る賢女」として、御台所はヒーロー不在のテキストである『護国女太平記』の真のヒロインである。彼女はあらゆる女らしい美德を備えていると称えられている。「実に女儀には珍敷御性質にて、礼儀正しく下を憐み、仁徳を専らと仕給ひ」¹¹。彼女はとても高德であるために、実際、その名前は決してテキストに登場しない。嫉妬深いと非難されないよう、御台所は吉里が甲斐の領主として柳沢家を相続できるよう主張した。家宣は將軍となり、井伊家の当主は大老としての地位を回復し、高潔な家臣が登用された。御台所は、天下を揺るがした日野富子や淀君といった、日本史に登場する他の有名な女たちとは全く正反対に位置している。それにもかかわらず、国家に対する忠誠心は王殺しや夫の殺人にまさるために、彼女が徳の高い女として称えられたということは注目すべきことである。

『護国女太平記』は、読者に満足のいくように過去を説明する民衆の想像力の代表的な一例である。そのはじまりから綱吉の奇妙な政策によって引き起こされた騒動まで、徳川時代の歴史であると称するにもかかわらず、今日的な意味で、それは歴史的なテキストではない。この点で、それは特異なものではない。『徳川実記』でさえ、林羅山の朱子学のイデオロギー的綱領に適うよう初期幕府の歴史を修正した。百姓一揆物語は、農民勢が闘いに繰り出したと描いているが、それはわれわれが今日考えているような事実とは矛盾している。こうしたテキストに真実を見出そうとするよりも、民衆的価値の観点を分析の方が意味がある。『護国女太平記』の場合が意味するのは、『女大学』といったテキストが女性的美徳についての決定的な意見ではなかったということ認めなければならないということである。

綱吉とは対照的に、將軍家斉の長い治世と彼のたくさんの子どもたちは民衆文化のお気に入りであった。彼の最初の子は、家斉が島津茂と結婚したちょうど一ヵ月後、「おまん」という側室の腹から生まれ

た。落首に、「薩摩芋ふける間を待ちかねておまんをくうて腹はぼてれん」。勝海舟らによると、小説『修紫田舎源氏』は実は家斉と大奥についてのものである。「その頃の大御所様（家斉）は妾の四十人もあって、子が六十人もあったほどの豪奢な方であった」¹²（この種の誇張は典型的な民衆の想像である）。この物語がよく知られていたことは、1851年に『田舎源氏』のヒーローである足利光氏に扮したある金貸しが、楽士や芸者と練り歩いたことからもうかがえる¹³。このように、ある町人は、足利時代に舞台を変えた『源氏物語』のパロディと称する小説を模倣したのだが、それが実際には徳川時代の大奥を舞台にしていることを人々はみな確信しているのである。これは当時の人々を大いに喜ばせた、くり返し引き合いに出された隠喩のうちでも完璧な一例である。幕府は『田舎源氏』を軽薄であると考え、1842年、天保の改革で発禁としたが、非常に人気があったため錦絵のシリーズや玩具にさえなったのであった。

小説だけが、暗黙のうちに大奥に対する好奇心を利用して読者の注意を喚起する男性中心的なテキストではない。和宮が将軍家茂と結婚するために京都から江戸へと移された時、最初期の瓦版の一部は、時の出来事に関する幕府の検閲に挑み、行列を描き、行列に加わった役人の名を記した。この事実の詰まった瓦版は、誇張や当てこすりに基づいた大多数の版画と著しい対照をなしている。例えば、風刺画は、大奥の高位にある女を描き、政治的な世界におけるあらゆる不正をドラマ化した。こうした版画は、時の政治的な出来事や周囲の男たちの引き立て役として仕える女たちを描く以上には、大奥の生活を描いてはいない。

1850年に登場した極めて有名な版画は「きたいなめい医難病療治」と名づけられている（図1）。中央に座るひとりの女は「やぶくすし竹斎の娘、名医こがらし」とされている。彼女を取り巻くのは男女の医師、そして患者である。その版画が登場するやいなや、彼女は姉小路の局を表象しているという噂が広がった。『藤岡屋日記』は、その版画に、大奥の女中が「御守殿のしり迄つめるとはんじ候よし」を表象したというひとつの解釈を与えている¹⁴。近眼が表象しているのは老中阿部正弘である。というのは、「鼻の先ばかり見えて遠くが見えない」からだ。また、一寸法師が表象するのは老中牧野忠雅である。「万

図1 きたいなめい医難病療治



東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵

事心が小さい」ためだ。足の悪いのは寿明姫である。寿明姫は家定と結婚したが、その後すぐに死亡した。石をもった男は酒井信明であると言われている。彼は磁石の力でろくろ首の女を治療しようとしているが、その女は鉄のやすりくずを髪に詰め、磁石は彼女の首を短くしようと尻に置かれている。彼女とその他の女たちはすべて御殿女中であると目されている。坪井信良からその弟に宛てた手紙によれば、「先々大略如此。尚デッシリ〔出尻ト云事〕痲積ロククロクビ等は皆女中ナリ、才子（弟子）も夫々役処アレトモ不分明、蓋シ皆々許多之批評ヲ含メリ」¹⁵。

この版画はたいへん評判になったために、江戸町奉行は再版を禁止し、その作者を尋問した。それは大量の模造品を産んだ。しかしながら、ジェンダー論の観点から、最も興味深い絵姿は右上部にいる女性が顔を釜に向けて蒸気に当てている姿である。坪井信良からの手紙と『藤岡屋日記』の両方によれば、彼女が表象しているのは十二代将軍家慶である。「わざと女形に描かれている……女人の間にいるから男であっても女の形としてある」¹⁶。将軍を女性として表象することは強い政治的メッセージを含んでいた。家慶はひ弱で、大奥の女性に支配された無力な指導者であったのだ。

討幕期の風刺画は、将軍の姿ではなく幕府自身を表象するために女性を利用する。三田村鳶魚は幕府の最期の日々を描いた七枚の錦絵を研究し、天璋院がそのどれにも、時に和宮と一緒に、時に上野の宮や他の僧侶と一緒に登場していることを明らかにした。ひとつの例が、多くの模写を産んだ「当世三筋のたのしみ」という版画である（図2）。三味線を弾いている女が天璋院である。彼女は言う「御ひいきを、なにぶん、御ねがい申升」。彼女の隣にいる女が和宮である。天璋院に向き合っている男が会津領主松平容保で、大きな声で「どうでやけどよ、かうなるからは親も主人もむかうづら」と歌っている。肩越しに振り返っている男が尾張領主である。小さな少年は言っている「をぢさん、はやくあそこへつれてっておくれよ」。彼は明治天皇であり、少年を取り囲む男たちは薩摩、長州などである。みなに背を向

図2 当世三筋のたのしみ



東京都江戸東京博物館蔵

けて横たわっている男は十五代将軍慶喜である。だが、彼は一橋候として描かれているだけだ。彼は言っている、「さきは大勢わたしはひとり、おもうおかたはふた心」。幕府を率いる将軍もなく、唯一残された人物が天璋院である。彼女は江戸の人々にとりわけ人気があり、実際に千代田城が官軍に引き渡される前に城を立ち去った最後の要人であった。

将軍についての民衆文学の研究と風刺画の一瞥から、女は支配者の特徴を輪郭づける際に、補足的ではあるが不可欠の役割を演じていたことが明らかになる。綱吉を家斉と比較することで示されるのは、将軍の人気に寄与したのは、彼が女と性交渉をしたかどうかではなく、彼がそのようにした状況にこそあった。自らの意志で性的な関係に耽った将軍は称えられたが、その性的欲望によって操られてしまうような将軍は軽蔑された。将軍や幕府を女として表象することは、その信頼のかなりの部分を失ってしまったことを強く示している。このことはからかいの一因であったが、それはある程度まで支配者の権威が江戸庶民の生活に重要性を失ったことを示している。

女性を中心化したテキスト

確かに、大奥の女たちは男から隔離された空間に引きこもっていると思われたために、また、千代田城の壁の内側で起きていることについてほとんど知られなかったために、大奥は記されるべき何ものかについての空白を表象した。民衆文化に見出された支配的な主題をもつこうした記述は、驚くべきものではない。はじめに挙げた項目に加え、ここには女色や男色、そして武家と庶民との危険をはらんだ関係が含まれている。女の活動と女同士の関係に焦点を当てるテキストを調べる際に、こうしたテキストでさえ男たちによって産み出され、男性的なまなごしによって支配されていたことに注目するのは重要である。しかしながら、男性中心のテキストとは対照的に、少なくともいくつかの場合には、同様に女性読者も念頭に置かれていたと思われる。

例えば、川柳は女たちの購買力とその性的欲望をからかっている。一例が、「小間物をだすとお犬が寄って来る」¹⁷。「犬」は大奥の長局に奉公に出た12、13歳の少女を指している。彼女らは滅多に千代田城を離れることが許されなかったため、数名の女商人が商品を長局に持ち込むことが認められた。だが、時には、女商人が彼女らが欲しがるものを携えてこなかった場合は、取次役として御広敷につめる御宰と呼ばれる男たちに頼らねばならなかった。彼らは注文品をつけて買い、金額を上乗せすることさえあったので、こうした取引は高くついた。「ちうもんい五分大きいを御菜かい」。小間物に含まれているものはというと、別の川柳はこんなことを言っている。「簪や櫛やへのこを出して見せ」。へのこは陰莖をかたどった張形を意味する。髪を飾る装飾品と一緒に、こうした女商人はより私的な用途のための道具を持ち込んだ。しかし、別の川柳によれば、ほとんどの又者は実際には高価な張形を買うことはできなかった。「はした金では張形は買えぬなり」¹⁸。このように、こうした川柳は、文化的実践としての消費や民衆文化における金と性との緊密な結びつきに別の観点をもたらししてくれる。

別の川柳には、おそらくは大奥のなかで行われているであろう性的な関係に焦点を当てたものがある。ある川柳は主題として御台所を取りあげた。「たまたまの事とはいえどもおさせ下手」。この川柳は、将軍が妻と滅多に性交渉をもたなかったという憶測に基づいている。彼が性交渉をすると、それはいやいやながら義務感からしたに過ぎなかった。その代わり、将軍や大名には、以下の川柳にあるように、あらゆる世の男たちから妬まれるような美しい女たちと性的に戯れるたくさんの機会があった。その川柳

は無責任な男性的快樂という意味をもっている。「殿様の夜ばいはずっかずっか行」。

大奥を扱った川柳の大多数は張形とその利用に焦点を当てている。例えば、「長局一女にへのご壺本ずつ」。川柳のなかには、女たちがこれらをひとりで用いたと推測したものもあれば、時には順番に、より頻繁には男性中心の性的関係に見出されるのと同様の支配とへつらいの不平等な関係に従って、張形をともに用いたとみたものもあった。「御局は若い女中にさせるなり」は、その一例である¹⁹。しかしながら、別の川柳には、こうした女同士のあらゆる性的関係は男性メンバーによる仲立ちに基づいていると思わせるものがある。「羅切して又下になる長局」²⁰。長局には完全な男性は足を踏み入れることができないため、そこにいる女たちは、張形、言い換えれば、宦官をつくるために切り取られたもので満足しなければならないのだ。

大奥における女性のセクシュアリティは錦絵における主題にもなっている。天保期の歌川豊国による版画は、三人の陰間が三味線や会話、いちやつきで三人の御殿女中を楽しませている姿を描いている（図3）。この版画のなかで、陰間はその髪から襦袢にいたるまで女性として装っている。目に見える差異は毛深い足首や前髪、そしてカツラの隙間からのぞく月代だけである²¹。陰間は女性のジェンダー役割を演じたために、この版画は、異性ではなく同じジェンダーのメンバー間に性的な出会いの可能性を示唆し、陰間という男性の仕事によって表象された正反対のジェンダー間に同性関係という転倒を示唆し、そしてそれとも異なり、同じジェンダーのふるまいを呈示するふたりの女の中に性的関係を示しているのである。もちろん、その版画は全く男性の幻想である。女性として装うにせよ、男娼は決して御殿に入ることはできなかった。

大奥に焦点を当てた春画における主要なテーマは、張形の使用である。田中優子は、女中のマスターベーションを示す場面が、17世紀における春画というジャンルのまさに発端から登場していると指摘している。女性のセクシュアリティの描写は、常にセックスを待ち構えた女という男性の幻想を表象しているに過ぎないとしばしば考えられてきた。だが、田中は、張形が男性的な梓組を示唆しているのでは

図3 陰間と御殿女中



梶崎宗重編『ヴィクトリア・アルバート博物館Ⅰ』講談社、1988、p. 102 (no. 122).

なく、その物質性において、女が経験した性的欲望の論拠を提示していると論じている。欧米の説や価値とは全く対照的に、江戸時代の女たちは精神と肉体の健康のためにマスターベーションをするよう奨励されていた。張形は御殿女中によるマスターベーションの目的のために発達した性的道具として、春画とは別に存在するとわれわれは認識しなければならない。だが、それにもかかわらず、春画における張形の利用は男性の想像の絵空事である²²。プルグフェルダー (Gregory M. Pflugfelder) は、当時の性的ディスコースにおいて、欲望の対象は固定されていなかったと指摘した。人々はなんであれよかたに過ぎない。それにもかかわらず、価値のヒエラルキーは存在した。あらゆる女性——女性セクシュアリティの描写は、川柳と同様に、春画の張形によって媒介されている。そして張形は男性メンバーの貧困な代替とみなされている。「互い形」を用いているふたりの女を描く絵においてさえも、書入れが示唆するのは、彼女らの関係は男が手に入らないための間に合わせの手段だということだ。男性画家の男根主義的幻想のために、どんな春画にも女性——女性の性的関係にペニスの代替物を挿入している。

タイモン・スクリーチ (Timon Screech) は、春画の目的は、少なくとも男性に対し、欲望を刺激してマスターベーションをさせることだと論じた²³。だが、この議論は別の利用を考慮に入れていない。張形をもつ女の春画が、男によって男性の読者のために産み出されたとすれば、女たちはどのようにそれらを見つめ、あるいは、用いてきたのかを知ることはできない。だが、女たちは、その好奇心を満足させ、性的なイメージによる行為を楽しむ機会を利用したのと同様、そのユーモアを楽しんだのかも知れない。

あからさまなセクシュアリティの例から転じて、以下に別種の女性中心のテキストを考えてみよう。ここで、わたしは「加々見山旧錦絵」を取りあげたい。これは、その名前にもかかわらず浄瑠璃である。その芝居は、大名屋敷に奉公するふたりの武士の女の中に1724年に起きた事件に基づくと伝えられている。その芝居はまず天明二年 (1782) に登場し、翌年には歌舞伎版が演じられている。こうした、またその後続く上演で、その筋は、名門の生まれだが貧しい岩藤という名の武家の女と尾上という名の町人の女との間にある階級対立に基づいている。その芝居は成功し、引き続き19世紀初頭まで上演された。上演はたいてい三月であったが、それは下級女中が御殿を離れ家族の許を訪れる時期であったためである。その芝居の最も有名な場面は奥を舞台としているため、奥で働く女たちが宿下がりの時でさえ我が身を当てはめて芝居を経験したかったのは意味深長である。

「加々見山旧錦絵」は、庶民の娘が御殿に奉公に上がることが一般的になったまさにその時に登場した。それは武士の貧困、町人の誇示的な富の表示、そして立身出世のためのあらゆる欲望をドラマ化している。ふたりの女の対立という物語は、足利持氏の鎌倉屋敷に舞台を移した加賀騒動の物語によって組み立てられている。逆臣の野望を軸としたこのお家騒動において、忠節と謀反を対照的に描いたその筋書は、女たちを軸とする階級対立によって時代錯誤になっている。それにもかかわらず、その階級対立は義務と義理の主張のもとに弱められ埋もれてしまっている。

「加々見山旧錦絵」における岩藤と尾上の対立を示唆する最初の伏線は第二幕で起こる。そこに登場するのは、美しく若い女性が、父である高木十内という浪人と一緒に神社で祈っている姿である。彼は神に病からの回復を祈願している。そして、「どふぞ我が出世の行く末。祈るより外望逆はない……口惜い無念はないやい。貧の病は薬もなく。助けてくれる仏神の力にも及ぬか」と呟く²⁴。鷺の善六はそれを耳にする。鷺の善六は、十内が借りた十両の借りをちらつかせる。十内に金がないならば、善六は借金のかたに、娘、お初を連れて行くだろう。そこで、口論となる。十内は死んで借りを返そうとする。お初は彼の自殺を止めようとする。ある商人が人混みのなかを押し分けて、十内の手をつかむ。彼は十内

の出世払いで構わないと、その借りを返すための金をやろうと申し出る。この商人は米問屋の坂間伝兵衛である。彼はとても裕福であったため、十両は彼にとってわずかな額なのである。そして、伝兵衛は、後に尾上と呼ばれることになる彼の娘が、三年前奉公のため、どのように足利屋敷に入ったのかを語る。「御気に入って今お申老に出世しました」²⁵。彼はお初を見習いとして尾上にとらせてはどうかと申し出る。すると十内は尾上へのお初の奉公が伝兵衛に対する借りを返す方法だと言う。

この場面の主要なテーマは、娘の親孝行によって隠された出世への欲望と圧倒的な金の重要性である。十内は貧困から抜け出る方法として出世がしたい。尾上は大名屋敷での働きによって、既に出世している。身分制という点で、お初が尾上より身分が高いとしても、十内は貧しく、尾上の父は裕福なため、屋敷のなかで尾上はお初の上役である。父の命を救ってもらったために、この武士の娘は町人の娘に忠節を誓う。

その芝居の最も有名な場面は、第六・七幕である。奥女中が鶴が岡へ花の方の御代参に赴く。花の方は足利持氏の正室である。岩藤は、足利家の永遠の繁栄を祈るために訪れたことを説明しながら、神主に不機嫌な顔をしている。祈祷が終わると、鶯の善六は女中が居並ぶ前で岩藤に声をかける。「此間仰付られました金子の義。へへへ御受取下さりませ」と。岩藤は答える。「いつもながら心遣は過分過分。しかし流石は町人のそなた、奥向きの事知ぬ筈は尤。コレ此の岩藤は局役じやぞや。むさくろしい物を取扱ふ役じやない」と。善六が応じる。「アア町人と申す者は賤しい者でござります。神仏より尊ぶ思ふ此金を。むさくろしい物などとお手にふらねぬといふ」と。だが、貧しい武家として、岩藤は善六が世話する金を必要としている。彼女のプライドは他の女たちの前でそれを受け取ることを許さなかったのであろう。彼女は町人と話している姿をみられたことに屈辱を感じていたために尾上を攻撃する。「町人には珍らしい気恥しいアノ善六。町人は賤しい物と感心した今の様子……ちつとこなたには差合で有た物。ホホホホヲ、わしとした事がつかつかと気の毒な。イヤ本に尾上殿。アノこな様の宿といふは金持なれど町人。仮親しての御奉公。スリヤ今わしがいふた事。気にさはりやしませぬか」と²⁶。

この場面は、ともに奥の閉じられた居室に暮らさねばならなかった、町人と武家の階級対立を明らかに示している。金の力によって、これまで武家を任命してきた空間に武家よりも劣位な町人の娘が奉公するようになり、そして、武家の生活様式を取り入れ、そこから町人自身の贅沢な生活水準を高めようとするようになった。武家が金の力に怨みを抱くのは当然であった。彼女自身ひとりの武家として、只野真葛はその憎しみはすべて町人の娘の側にあると断じていた。町人によって書かれたこの浄瑠璃は、一方で、作り出した対立の汚名を武士の娘に着せている。

その筋書をつくらせた階級対立は現代の読者にとって明らかではあるものの、登場人物に帰せられた動機によって、階級対立は曖昧にされている。舞台上の岩藤の最初の登場は、彼女が他の女中を虐待するだけでなく、足利家に対し反逆をしかける悪女であることを示している。尾上は、足利家への忠節を誓っているために、岩藤によって自分が煽動されてしまうことを固く戒めている。これは、武士によって主張されていた美德が、実際には、町人の間に見出されるという表明である。岩藤が尾上を扇で打ち、頭を草履で叩いた時でさえ、彼女はふたりのいさかいが足利家にとって不名誉をもたらさないよう、おとなしくその譴責を受けとめる。ただ、長局に戻ると、耐えてきたことへの屈辱によって尾上は自殺に追い込まれてしまう。そこで、彼女の忠実な女中であるお初が岩藤を殺すことで女主人の仇を討ち、裏切り者岩藤の正体を暴くのである。岩藤の敗北は、町人であれ武士であれ、あらゆる下級女中を喜ばせた。

「加々見山旧錦絵」にしばしば見逃されてきたわき筋に、傾城の道芝太夫とその姉お来の存在がある。足利持氏の息子である縫之介への愛から、道芝は足利屋敷へなんともぐり込む。彼女が縫之介を魅了し、縫之介は將軍によって選ばれた正室と性的な関係をもつことを拒絶したため、道芝の父は足利家への忠誠心から娘を殺すよう迫られる。お来が登場する最初の時点で、彼女は茶店女房である。第五幕のはじめには、彼女は綿くり女である。だが、彼女は自分の身を百両で売ることに同意する。彼女は母親を看病し、両親をたすける金が必要であるためだ。「悔しい今の貧苦」。お来は彼女を買う男にそう語る。お初のように彼女は孝行を称えられる。道芝とお来はどちらも足利家に関係があるために、彼女らは、御殿や遊郭の世界が民衆の想像のなかでいかに密接に結びつけられていたかを補足する論拠となっている。

19世紀には、岩藤と尾上についての物語にまつわる多くの脚色は、怪談や通俗的道德をパロディ化する選好の拡がりに影響されるようになっていた。「後日の鏡山、骨よせ岩藤の趣向」は天保八年（1837）に鶴屋南北によってはじめて上演された。そして、それは慶応三年（1867）には川竹黙阿彌によって書き直された。岩藤はお初に殺されると、その躰は馬の死骸置場に投げ捨てられる。ある夜、今や第二の尾上となったお初が岩藤のために経をあげに来ると、その骨は再び組み合わさって一体の骸骨になる。骸骨は何度も草履でお初を打ち据え、御殿の花園姫に復讐しようとする。このかなり後期の異説においてさえ、階級対立と身分上のルサンチマンは反逆罪の名の下に包摂されている。

なぜ「加々見山旧錦絵」や「後日の鏡山」が、武士と町人、あるいは高位の武士と低位の武士との対立を明らかに描かなかったかには、少なくとも四つの理由がある。第一は、幕府によって設けられた検閲制度であった。その検閲制度によって、幕府に異議があると見なされるものを慎重に曖昧にしておいたのであった。第二は、『仮名手本忠臣蔵』に典型的にみられる支配的な価値システムであった。町人は武士を嘲ったが、彼ら自身の勤勉や儉約、不屈の精神といった価値は、忠節や親孝行という武士の価値に取って代わったというよりも、むしろそれを補強したのであった。第三に指摘するのは、民衆の想像力に固有の限界である。19世紀はじめにおける都市の日本を特徴づける芝居文化には、おそらくは政治的無気力から、おそらくは庶民とほとんどの武士が政治に何ら発言権をもたないというシステムのフラストレーションから、深刻に受けとめられた芝居はなかった。1850年にはじめて歌舞伎にドラマ化された「佐倉惣五郎物語」でさえ、百姓と領主の対立を怪談に包摂した。そして最後に、男尊女卑の態度が拡まっていたことを指摘することができる。川柳や春画が、女性のセクシュアリティはペニスへの欲望という点でのみ想像しうるものであったと教えてくれるように、岩藤と尾上の対立もまた男性の逆臣と忠臣との闘争という点でのみ説明しうるものであったのである。

女に向けられた民衆文化

本稿の論点のために、わたしは18世紀後期に始まり、ともに作用したふたつの過程を強調したい。上にみてきたように、この時代には、女中奉公のイメージは、小説、錦絵、川柳、浄瑠璃、歌舞伎に埋め込まれるようになっていく。こうしたイメージに従って、われわれは武家の娘と同様に町人の娘を見出す。さらに、以下に論じるように、奉公自体は、社会・文化資本を増大させたいと熱望する女たちによって求められるひとつの商品になっている。経済資本がたいていは男に関連づけられるのに対し、社会的ネットワークをつくることや洗練された都市の所帯を野暮から区別する卓越化の徴を獲得することは、

また女たちの仕事となる。吉田伸之は『岩波講座日本通史』の江戸に関する論文のなかで、大名屋敷を「奢侈的・寄生的・非生産的消費を本位とする」ために批判している²⁷。だが、わたしが論じようとするのは、それらが贅沢や誇示的消費の中心であったからこそ、大名屋敷奥向や大奥が江戸文化において重要な役割を果たしたことは確かであるということだ。さらに、彼女らは品物やサービスを自身で消費しただけでなく、消費の基準をもつくれたのであった。スーザン・マン (Susan Mann) は、趣味を表示するモノや技術の獲得は欠点ではなく良い育ちと知識の徴であると論じている²⁸。この観点から、女たちによって演じられた役割は非常に重要となる。消費の対象として役立っただけでなく、本稿のはじめのふたつの節のみたように、彼女らはまた消費者としてもはたらきかけたのであった。

江戸時代の女性が結婚前に奉公をしたことはよく知られている。唯一の例外が極めて高貴な武家や公家の娘であった。多くの場合、その目的は収入を稼ぐことや家族の食いぶちを減らすためではなく、世の中の経験を得ることであった。江戸や江戸近郊に住む女たちにとって、奥や大奥での奉公は、単に別の所帯のやり方を学ぶためではなく、礼儀作法や行儀、様式を学ぶための望ましい方法になっていた。御殿奉公を前近代の女子短大とみなした多くの研究者のひとりが、三田村鳶魚である。

女の教育というこのシステムは、まずおそらく徳川時代の始めには存在しなかった。御殿女中として奉公する女たちの数は少なく、そのほとんどは武家の出身で教養水準は低かった。公家文化の紹介は、将軍家宣の正室近衛熙子とその後継者によってもたらされた。公家文化の導入は、18世紀はじめに始まっていた武家の教養水準の漸進的な向上に寄与したとみることができる。畑尚子によれば、重要な転換は18世紀後期の奉公に生じた。そこには、ふたつの過程が作用していた。ひとつは御殿内に増大する庶民の女性の存在。もうひとつは、武家屋敷で女によって演じられた歌や踊り、音楽の大衆化の高まりであった。このため、女たちは一芸を学ぶためではなく、既に習得している芸を磨くために御殿に奉公に出たのである。奉公は結婚の準備となり、一芸を学ぶことは奉公の準備となった²⁹。三田村鳶魚は批判的であったものの、幕末に近づくにつれ、御殿は町人の娘が浄瑠璃や三味線を知らなければよい地位を得ることができない場として、ますます知られるようになっていった。百姓や町人の娘が御殿に働きに行くと、彼女らが武家らしくなるというより、むしろ御殿の特徴を変えてしまった。幕府が崩壊する前でさえ、武士道は既に崩壊していたのであった³⁰。

芸能の習練の需要が高まったことによるひとつの帰結は、女が師匠として生計を立てる機会が増大したことであった。多くの場合、こうした女は、御殿女中として奉公する間にその芸を完全なものとしていた。例えば、町人の娘「さよ」は、大名屋敷で働く間に、読み書きと三味線を弾くことを学んだ。御殿を離れると、彼女は故郷に戻り、少女に基本的な識字と女の道を教育した。この収入によって彼女は病にある両親を養った。「さよ」は寛政三年(1791)に親孝行によって表彰された³¹。桐生出身の田村梶子は17歳で奉公のために大奥に入った。彼女は31歳で故郷に戻ると、婿養子を取り、家族の事業を切り盛りした。同時に彼女は私塾を開き、そこで少年や少女に手跡や和歌、礼儀作法を教えた³²。天保の改革の一部として、幕府は男や女に三味線や浄瑠璃を教える女たちを取り締まった。『藤岡屋日記』はこの禁則をおかしたたくさん女の逮捕者を記録した³³。三味線や浄瑠璃は御殿と同様、遊郭においても人気のある娯楽であったため、こうした師匠がみなそうした習練を御殿女中として受けたと仮定することはできない。それにもかかわらず、芸能は徳川時代の後半期までにはひとつの商品となっており、大奥や奥がこうした状況に重要な役割を果たしたことは明らかである。

図4 娘諸芸出世雙六



東京都江戸東京博物館蔵

大奥や奥の役割の重要な論拠の一部は、芸能に対する関心の増大に寄与したという意味で、双六から生じている。岩城紀子による近世双六の詳細な分析によれば、その主題として娘諸芸を取りあげた初期の双六が安永期（1770年代）に出版されている³⁴。それは、お琴、太鼓、笛、三味線、御茶の湯、生け花などといった、さまざまな芸能を演じる女たちを主人公にしている。あらゆる芸は仮名で書かれ、シンボルで徴がつけられている。そのため、非識字者やほとんど字を読むことのできない者でさえ、そのゲームで遊ぶことができた。その上がりは御奉公である。時代が下り、これと同じ主題のより洗練された改訂版は、弘化期（1840年代）に『娘諸芸出世双六』と名づけられた（図4）。それは、師匠や演者を間接的に仄めかしながら、芸能という実践に必要な身支度や道具を示している。さまざまな型の音曲に加え、習いごとは諸礼、武芸、和歌や蛮画が含まれる。こうして、これらの技術を身につけたある娘は、御祐筆、おぐしあげ、お妾、お年寄などになるチャンスを獲得する。左下隅の安全なマスが縁付きである。そこに止まったゲームのプレイヤーはこう言われる「この所身のおさまりゆえ、もはや外へでることなし」。女の出世を主題としたこの版では、御殿と結婚は正反対の極にある。

岩城は、出世双六は広く普及した情報に基づいているために、慣習についての史料となると指摘している。それは、人々が着たものやしたこと、人々の識字力や価値観がどのようなものであったかという

ことである。概して、双六では、上昇すればするほど、中心に向かえば向かうほど、描かれているものが何であれ価値は上昇している。底辺のマスに描かれた人々は、単に貧しいだけでなく、道徳的美徳も欠いているのだ³⁵。また女向けの双六は、さまざまな芸や芸を通じて成り上がる機会や、さもなければ到達できない機会を知らしめるものとしてみることもできる。19世紀までに、芸は奇異な商品から不可欠の必需品に転換すると同時に、女たちは主要な消費者になっていた。

双六のなかには、大奥の女たちによって占められたさまざまな身分や役を利用して、身分制によって課せられた制限を無視した、立身出世のためのプログラムを展開したものもある（図5）。針妙から御はしたまで、プレイヤーは上昇する機会を得て、また御仲居や御末などへ、更に、部屋子、呉服間、御三の間、御次などになった。一番上の身分は中臈、御部屋様（將軍の子をなした中臈）、老女、御側であり、そして最終的に上がりである。この双六は奥における役職とその役目に関するかなり多くの知識を反映しているが、年寄といった立場を高貴な生まれの武家の娘に限定した社会移動の制限に従うよう主張しているわけではない。御部屋様が言うには、「われわれなどのいやしき身がこのやうに出世するのもみな天とうのおめぐみ」である。また双六には、大奥のなかに降職の規定がないにもかかわらず、プレイヤーが上昇するのと同様に下降する可能性が示されている。この双六に描かれた唯一の成人男性は、女たちの引き立て役として登場している。一番上の脇に、表使の役目が広敷用人の面談を通して説明されている。左下隅のマスに、ある女が御暇になり、宿元に追いやられると記されている。こうした双六はある女の世界における女同士のつき合いを描いているが、この世界は男性によってつくられ、その存在は男

図5 奥奉公出世雙六



東京都江戸東京博物館蔵

たちに拠っているのである。

ある双六は、奥の楽しみを描くことで、かなり広範に普及していた江戸の消費につながった娯楽を題材にしている(図6)。その双六は、田村家によって文京ふるさと歴史館に寄贈されているが、田村家の先祖は幕末に御広敷用人として大奥に勤めていた。これは由来が知られているわずかな双六のうちのひとつである。武家の娘も町人の娘も、どちらもその双六で楽しんだであろうと思われる。双六に描かれた楽しみは、女たちによってされたことと女たちのためにされたこととを織り混ぜ、また下品なものとして上品なものを織り混ぜている。その最も下世話なものは右下の隅に表わされている。これがしりふり踊りである。「わが竹さんしりふりおどりハ、わたしが一ばんじやうだよ」と。楽しみには少女や女たちによって遊ばれたゲームからなるものがある。そこには御茶坊主、双六、鳥さし、福びき、歌かるた、などが含まれている。だが、最上段の花見がそのプレイヤーに思わせるのは、食べ物や酒がなければ、花見などに愉しみはないということだ。対照的に、お月見が示唆するのは、どのような状況であれ、常に物事のよい面をみるようにせよということだ。「あれ、殿様御覧あそばせ、月に群雲、花に風と障りのようにいひますれど、群雲の月に半分かかりたる景色がどうもいえませぬ」。娯楽には長唄、清元、太神楽のように男性によって演じられたものがあり、宿下りの御殿女中がそれらを見る機会があったことを示している。あらゆる娯楽のなかでも最上のものが歌舞伎見物である。また、この双六は教訓的な目的ももっていた。左下のマスは三日えんりよを示しているが、これが示唆するのは、女は男とのつきあいのなかで慎重であるよう学ばねばならなかったということだ。「もうもうこれにこりて御錠口へ行、おとこには口をきくまい、こりごりした」。

図6 奥勤たのしみ双六



文京ふるさと歴史館蔵

奉公を女のライフコースという文脈に置いた別の双六は、一層教訓的である。そうした双六はキャリア上の出世の可能性だけでなく、成長過程を反映している。「奥奉公二偏娘一代成人双六」は、女が生涯を通して直面する波乱を示している（図7）。小さな少女は宮参りをし、昼寝や手習いをするであろう。また彼女は折檻を受けるかも知れない。奉公は女たちによって演じられるまさにひとつの仕事であり、他には洗濯や手鍋がある。もし運がよい女であれば、旅立ち、見合、初産をするか、あるいは奥さまという最上級の称号を含む、なにがしか妻となるであろう。換言すれば、岩城が指摘したように、奥奉公は幸せな結婚のための条件のひとつになっている。だが、もし不幸な女であれば、嫉妬の犠牲となり、夫と仲違いし、あるいは苦界に身をやつすかも知れない。あらゆる望みは失われる。が、あるきっかけを待って、このマスに止まったプレイヤーは「おかみさん」に飛ぶこともある。他の双六と同様、この双六は男が周縁的な役割を演じるだけの女の世界を描いている。そこではひとつひとつのマスを歌われている文言は品行の悪さに対する警告が含まれている。それが、この双六をゲームであると同時に教訓たらしめている。

岩城は、男の出世を示す双六には、武士がどこにも見出されないと指摘している。町人の場合は出世がそれ自身の世界のなかで達成されるが、それは武士が関係性をもたない世界である。このことは女の双六とは全く正反対である。そこでは出世は常に御殿奉公を含んでいるのだ³⁶。女は男よりもさまざまな職業に時を費やさないが、彼女らは一層さまざまな経験を積んだ。双六は、女に起きた出来事が男次第であることを思わせると同時に、身分の序列を超えてともに社会を編成するという意味で、女によって

図7 奥奉公二偏娘一代成人雙六



東京都立中央図書館東京誌料文庫蔵

果たされた重要な役割を仄めかしていると言うこともできる。

生涯を通じて携わるであろうさまざまな職業を描く、女のための双六がある。これらは、生きるために女がした広範な仕事を一瞥することで、上品なものと同様なものとを織り混ぜている。「婦人一代出世双六」(図8)は、おさんどの、鮑取、蚕養女、機おり等として働く女たちを表している。また、芸の師匠として女たちが保持した重要な場は踊り、手習い、琴や三味線の女師匠を示す上から二列目に反映されている。奥の世界を反映する役は、部屋かた、おすえ、御殿女中、御とし寄りである。またこの双六は、びくいや女乞食と同様、女太夫、芸子、茶屋女、辻君(娼婦)を示している。そしてまた、芸子や辻君らは、御殿と遊郭の世界が民衆の想像のなかでどのように緊密に結びついているかを今一度われわれに思い起こさせてくれるのである。

『護国女太平記』や「加々見山田錦絵」、そして双六は、ほぼ全ての女たちは性的に自由となる潜在的可能性をもつと考えている。この意味で、こうしたテキストは女に焦点を当て

た単一の言説の内部で相互依存的に共存している。横田冬彦は、『女大学宝箱』や『好色一代女』などといったテキストを用いてこの言説を分析した。彼の結論に拠ると、女たちが人生を通して直面するであろう「渡る世間は鬼ばかり」の出来事に対し、またとりわけ貞節の危機に対し、こうしたテキストがいかに警告したかをみることができる。こうして、それらは「社会的に労働する女性の内面に、〈遊女化〉=性的退廃という非難から身を守るために、常に過剰に自己抑制させるという規範(「よき風俗」)をつくりあげてくれたのである³⁷。この言説がいかに男の利害に適合するかをみることが容易である。それにもかかわらず、女が立身出世する多様な仕方を認めるという点で、出世への道の途上にある多くの陷穽に対する護身術を呈示するとともに、それは彼女らの努力を価値づけている。

結論

江戸文化における大奥という場は、文化をつくりあげた諸要素への言及なしに判断することはできな

図8 婦人一代出世雙六



東京都中央図書館東京誌料文庫蔵

い。その文化とは、事実を超えた想像への選好、立身出世の重要性、そして、どう獲得しどう使うかの両方に関わる金の力である。こうした諸要素は、多くの女性や若い男性を性的対象とする男性のまなざしによって支配されている。このため、『護国女太平記』や『田舎源氏』は、遊郭を扱う文学に描かれた男同士の関係を単に大奥に置き換えたものとして読むことができる。それにもかかわらず、男根主義的な世界においてさえ、女たちは消費者として登場する。大奥で生活し奉公する女たちは誇示的消費を表示したが、誇示的消費の一部は、庶民の女が雛祭りをみるために本丸に入ることを許されたときや大奥台所で残った食べ物が土産として縁者に配られた際に、庶民の女にも目に見えるものになった³⁸。「加々見山田錦絵」は、芝居小屋に行くのを好んだ宿下りの女たちに合わせて三月に開かれたが、それは彼女らの存在がその興業スケジュールを決定したことを示している。さらに、本質的には、女たちはその芸を売ることによって大奥に立場を得ていた。この場合、着物や芸に費やされた金で、女たちは、自身やその家族が生活の安定のために拠り所とする文化資本や社会資本を蓄積することができたのであった。

いくつかの断片的な根拠から示されるように、女の役割を分析することは徳川時代の歴史における重要な転換点を明らかにする補足材料となる。岩城と畑が既に明らかにしているように、安永期は、御殿における町人の娘の登場や女が一芸を身につけることの流行によって特徴づけられる重要な転換点を示している。「娘諸藝双六」の登場からわずか数年後に、御殿における町人の娘と武家の娘との関係を描いた最初の芝居「加々見山田錦絵」が、江戸で上演された。またこの時代は民衆運動においても、訴訟や強訴から打毀しへという決定的なシフトを画している。ジェームズ・ホワイトはこのシフトを論拠として、商業がさまざまな庶民の階級間を支配するようになると、政府はその生活における重要性を失ったと論じている。危機からの救援を役人に求める代わりに、百姓や町人は互いに向き合った³⁹。わたしが提示した論拠は、その過程がもう少し複雑であったということを示唆している。支配者の権威と庶民との危険をはらんだ関係は非関与的にはならなかった。その代わり、金によって媒介されるようになればなるほど、あらゆる階級の女たちは、女のものである内の世界を、男のものである外の世界に結びつける消費の行為主体であるとともに消費の対象として、包摂されるようになっていったのである。

(訳 森本恭代 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター研究機関研究員)

*本論文の訳出にあたり、お茶の水女子大学人間文化研究科・大口勇次郎教授、同大学ジェンダー研究センター研究支援推進員・小山直子氏に、江戸期の歴史・文化について教授いただくとともに、校正のうえで助言をいただいた。ご多忙のところ、貴重な示唆をくださった両氏に、ここに記して感謝申し上げます。

注

1. 茨城県史編さん幕末維新史部会『茨城県史料 幕末編1』(茨城県、1971)
2. 例えば、綱吉の娘が柳沢の別宅である六義園で一日を過ごしたとき、彼女は土産物屋を模した店先で買い物ごっこをするような体験を得た。内田保廣「江戸の女流日記」『国文学解釈と鑑賞』昭和60年7月号(第50巻8号)(至文堂、1985) p. 50. また諸家お住居の姫君は、年頭の御祝儀として登城する時に、東海道五十三次宿々の商店を模した山里の庭で、土地の名物を品さだめした。永島今四郎・太田賛雄編『定本江戸城大奥』(人物往来社、1968) pp. 243-245.
3. Susan Mann, "Engendering the Histories of 'Asian Civilization'" a talk for AAS Regional Conferences, 1999-2000, p. 17.
4. 三田村鳶魚『三田村鳶魚全集』第1巻(中央公論社、1976) pp. 207-208.
5. 鈴木棠三、小池章太郎編『近世庶民生活史料藤岡屋日記』第二巻(三一書房、1988) pp. 171-173.

6. 同上、p. 167.
7. 三田村鳶魚校訂『柳澤越後黒田加賀伊達秋田騒動實記』帝国文庫第15篇（博文館、1928）p. 5、『常憲院殿御実記』が記しているところによれば、こうした物語を信じることで、庶民はたいへん無礼にふるまった。
8. 早稲田大学出版部編輯（坪内逍遙鑑選）「柳沢騒動」『近世実録全書』第8巻（早稲田大学出版部、1928）p. 20.
9. 同上、p. 46.
10. 同上、p. 147.『三王外記』は、信子が夫である綱吉を殺したと主張した、明らかに最初のテキストである。
11. 同上、p. 139.
12. 三田村鳶魚『三田村鳶魚全集』第21巻（中央公論社、1977）p. 357.
13. 三田村鳶魚『三田村鳶魚全集』第23巻（中央公論社、1977）p. 211.
14. 鈴木棠三、小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第四巻（三一書房、1988）p. 134.
15. 岩下哲典『幕末日本の情報活動—「開国」の情報史—』（雄山閣出版、2000）p. 128. ["Political Information and Satirical Prints in Late Tokugawa Japan: The Popular Image of Government Officials in Utagawa Kuniyoshi's Kitaina Mei'i Nanbyo Ryoji," *Asian Cultural Studies*, no. 22 (March 1996) p. 24].
16. 南和男『江戸の風刺画』（吉川弘文館、1997）p. 174.
17. 三田村鳶魚『三田村鳶魚全集』第1巻（中央公論社、1976）pp. 120-121.
18. 北村鮭彦『川柳大興談』『歴史読本』1989年1月号（第492号）（新人物往来社、1989）pp. 106-107.
19. 同上、p. 107.
20. 似実軒酔茶撰『誹風末摘花』第壹巻.
21. 榑崎宗重編『ヴィクトリア・アルバート博物館Ⅰ』（『秘蔵浮世絵大観』第四巻）（講談社、1988）p. 102 (no. 122).
22. 田中優子『張形—江戸をんなの性—』（河出書房新社、1999）pp. 4-5.
23. タイモン・スクリーチ『春画—片手で読む江戸の絵—』高山宏訳（講談社、1998）
24. 田川邦子校訂『江戸作者浄瑠璃集』（高田衛・原道生編『叢書江戸文庫15』）（国書刊行会、1989）p. 372.
25. 同上、p. 375.
26. 同上、pp. 420-421.
27. 吉田伸之『巨大城下町—江戸—』『岩波講座日本通史 近世5』第15巻（岩波書店、1995）p. 159.
28. Susan Mann, *Ibid.*
29. 畑尚子「奥女中奉公について」『東京都江戸東京博物館研究報告』第三号（東京都江戸東京博物館、1998）pp. 138-140.
30. 三田村鳶魚『女の世の中』（青蛙房、1958）p. 60, pp. 65-67.
31. 菅野則子校訂『官刻孝義録』上巻（東京堂出版、1999）
32. 柴桂子『近世おんな旅日記』（吉川弘文館、1997）p. 152.
他の女たちにも同様のケースがある。清水貴子「わが家の『道中日記』」東京桂の会編『江戸期おんな考』第10号（桂文庫、1999）p. 95を参照のこと。
33. 例えば、鈴木棠三・小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第二巻（三一書房、1988）pp. 228-231を参照。
34. 岩城紀子「双六」に関する報告。お茶の水女子大学、2000年7月5日。
35. 岩城紀子「出世双六の変化—幕末から明治へ—」『風俗』第32巻 第3号（通巻116号）（日本風俗史学会、1994）pp. 62-63, p. 72.
36. 東京都江戸東京博物館編『絵すごろく—遊びの中のあこがれ—』（東京都江戸東京博物館、1998）pp. 18-24.
37. 横田冬彦『「女大学」再考—日本近世における女性労働—』脇田晴子、S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史—主体と表現、仕事と生活—』下巻（東京大学出版会、1995）p. 383. ["Imagining Working Women in Early Modern Japan" In *Women and Class in Japanese History*, eds. Hitomi Tonomura, Anne Walthall and Wakita Haruko (Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1999)].
38. Oguchi Yujiro, "The Tokugawa shogun's 'court' as an economic institution" In *La cour comme institution économique* eds. Maurice Aymard and Marzio A. Romani (Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme, 1998) p. 216; 大口勇次郎「農村女性の江戸城大奥奉公—生麦村関口千恵の場合—」『女性のいる近世』（勁草書房、1995）pp. 174-176, p. 189.

39. James W. White, *Ikki: Social Conflict and Political Protest in Early Modern Japan* (Ithaca: Cornell University Press, 1995).

参考文献

- 茨城県史編さん幕末維新史部会編、『茨城県史料 幕末編1』茨城県、1971年。
- 岩城紀子「双六」に関するレジュメ。お茶の水女子大学、2000年7月5日報告。
- 岩城紀子「出世双六の変化—幕末から明治へ—」『風俗』第32巻 第3号（通巻116号）（1994）：62-87。
- 岩下哲典『幕末日本の情報活動—「開国」の情報史—』雄山閣出版、2000年 [“Political Information and Satirical Prints in Late Tokugawa Japan: The Popular Image of Government Officials in Utogawa Kuniyoshi’s Kitaina mei’i nanbyō ryōji.” *Asian Cultural Studies*, no. 22 (March 1996): 17-26].
- 内田保廣「江戸の女流日記」『国文学解釈と鑑賞』昭和60年7月号（第50巻8号）（1985）：46-53。
- 大口勇次郎「農村女性の江戸城大奥奉公—生麦村関口千恵の場合—」『女性のいる近世』勁草書房、1995年。
- 菅野則子校訂『官刻孝義録』上巻、東京堂出版、1999年。
- 北村鮭彦「川柳大奥談」『歴史読本』1989年1月号（第492号）（1989）：106-107。
- 柴桂子『近世おんな旅日記』吉川弘文館、1997年。
- 清水貴子「わが家の『道中日記』」東京桂の会編『江戸期おんな考—史料と人物—』第10号（1999）：92-96。
- タイモン・スクリーチ『春画—片手で読む江戸の絵—』高山宏訳、講談社、1988年。
- 鈴木棠三、小池章太郎編『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第二巻、三一書房、1988年。
- 。『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第三巻、三一書房、1988年。
- 。『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第四巻、三一書房、1988年。
- 田川邦子校訂『江戸作者浄瑠璃集』（高田衛・原道生編『叢書江戸文庫15』）、国書刊行会、1989年。
- 田中優子『張形—江戸をんなの性—』河出書房新社、1999年。
- 東京都江戸東京博物館編集『絵すごろく—遊びの中のあこがれ—』東京都江戸東京博物館、1998年。
- 永島今四郎・太田賛雄編『定本江戸城大奥』人物往来社、1968年。
- 榎崎宗重編『ヴィクトリア・アルバート博物館I』（『秘蔵浮世絵大観』第四巻）講談社、1988年。
- 似実軒酔茶撰『誹風末摘花』第壹巻。
- 畑尚子「奥女中奉公について」『東京都江戸東京博物館研究報告』第三号（1998）：137-160。
- 三田村鳶魚校訂『柳澤越後黒田加賀伊達秋田騒動實記』（『帝国文庫』第15篇）博文館、1928年。
- 三田村鳶魚『三田村鳶魚全集』第1巻、中央公論社、1976年。
- 。『三田村鳶魚全集』第21巻、中央公論社、1977年。
- 。『三田村鳶魚全集』第23巻、中央公論社、1977年。
- 。『女の世の中』青蛙房、1958年。
- 南和男『江戸の風刺画』吉川弘文館、1997年。
- 吉田伸之「巨大城下町—江戸—」『岩波講座日本通史 近世5』第15巻、岩波書店、1995年。
- 横田彦彦『「女大学」再考—日本近世における女性労働—』脇田晴子、S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史—主体と表現、仕事と生活—』下巻、東京大学出版会、1995年 [“Imagining Working Women in Early Modern Japan” In *Women and Class in Japanese History* eds. Hitomi Tonomura, Anne Walthall and Wakita Haruko, Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1999. pp. 153-167].
- 早稲田大学出版部編輯（坪内逍遙鑑選）『近世実録全書』第8巻、早稲田大学出版部、1928年。
- Mann, Susan. “Engendering the Histories of ‘Asian Civilization’” a talk for AAS regional conferences, 1999-2000.
- Oguchi, Yujiro. “The Tokugawa Shogun’s ‘Court’ as an Economic Institution” In *La cour comme institution économique* eds. Maurice Aymard and Marzio A. Romani, Paris: Éditions de la Maison des sciences de l’homme, 1998. pp. 209-217.
- White, James W. *Ikki: Social Conflict and Political Protest in Early Modern Japan*, Ithaca: Cornell University Press, 1995.
- Pflugfelder, Gregory M. *Cartographies of Desire: Male-Male Sexuality in Japanese Discourse, 1600-1950*. Berkeley: University of California.